

若い人たちの歌

前中 映

「現代短歌」二〇二一年九月号の特集「Anthology of 60 Tanka Poets born after 1990 (1990年以降生まれの歌人六十人のアンソロジー)」。当時の年齢で二十一歳から三十歳までの若手歌人六十人の自選作品が十首ずつ収められていて、大変読み応えのあるものになっている。今回はこの特集の中から私が特に惹かれた歌を読み直しながら、文体の違いとそこから受ける印象の違い、そして歌の中の「私」について考えてみたい。

● 文語の歌・口語の歌と「私」

若い人の歌イコール口語という印象があるが、口語メインの中に文語の助動詞が交じるといふ人まで含めると二十人ほどが文語を使っている。その中で文語をメインに使っている歌人は十二人。特に惹かれた作品をいくつか挙げてみる。なお所属結社はこの特集の略歴による。

おにぎり箸で食べゆくさみしさは何だら

う母と九年を会はず

山下翔(やまなみ)

母の愛、親子の繋がりとといったイメージと結びつきやすいおにぎりを箸で食べるという行為が現実の母との距離を感じ

ゆせ「さみしき」が読み手に染みてくる。

雪平鍋の底へ火、花のごとき火を風強き日の夕餉の前に 廣野翔一(塔)

一人暮らしのわびしいキッチン。そこにせて「花のごとき火」があつてほしいという願いが切ない。

死ぬるほどの恋と思ひて死なざりき水ほそく出しグラスを洗ふ 菅原百合絵(心の花)

水流の冷たさとグラスの硬さ。「私」の現在の心境が具体的な手触りとなって読み手に伝わる。

カーテンに鳥の影はやし速かりしのちつくづくと白きカーテン 小原奈実

時間にすれば数秒のできごとを映像的に切り取って美しい二句切れだが二句と三句の音の重なりで上の句を一気に読ませ、カーテンの白さにその余韻がいつまでも残る。

一方、口語短歌で私が特に惹かれた歌は次のようなものだった。

暑苦しい乳房を脱げばさえざえと硬貨のよくないのちが残る 道彦はな(未来)

女性である「私」がその女性性を脱ぎ捨てたときに残る

「硬貨のようなのち」は美しく輝いているのだろうか。それとも小さく冷たい無機質なもののだろうか。

沈丁花 架空の文字を考えてそれが漢字に似てしまうまで 西藤定(未来)

何とも不思議な一首だが、見たことのない文字のかたちと沈丁花の花房の姿が重なって印象的。

服を脱ぐ何千枚も服を脱ぐあなたは桜吹雪のように 平井俊(八雁)

「あなた」が朝に晩に服を脱ぐ、その映像だけが何年分も何十年分も繰り返され、その映像から桜の花びらがどつと噴き出してくるイメージの美しさ。

浴槽に降り積もる雪 うつくしいのは生活をあきらめたから 田村穂隆(塔)

温かい湯に満たされるはずの浴槽に積もる冷たい雪。「生活をあきらめ」ることの淋しさと、その淋しさを突き抜けたところにあるすがしさ。

多くの人がそうだと思うのだが私も文語作品と口語作品では受ける印象がかなり違うと感じる。ではいったいどこが違うのだろうか。今回これらの作品を読み比べてみて、次の点に差異を感じていることに気づいた。

まず、私には文語作品の方がその内容が作者にとつての現実であるという感覚が強くなるように思われる。作者の人生、作者の経験、作者の見たものや思ったことが直接その歌に反映されているような気がするのである。山下翔や菅原百合絵の作品にある母との関係や恋愛は明らかに作者の人生に関わ

るものだろうし、廣野翔一の作品にも作者自身の生活の匂いを感じられる(「作業員・廣野翔一、醜聞の特に無ければ赤だし啜る」という歌もある)。また小原奈実の歌はいわゆる「生活感」とは遠いものだが、彼女の作品は作者自身が見たものを鮮やかに切り取ったもののように読める。つまりこれらの歌を読むとき私は歌の中の「私」＝「作者」という感覚で読んでいる。

一方、ここに挙げた口語作品に共通しているのは現実的な映像を結ぶことができそうでできず、読む度に映像が浮かびかけては消えるという点である。私は作歌を始めた頃に笹井宏之の「晩年のあなたに窓をとりつけて日が暮れるまで磨いていた」という作品を読んで、「あなたに窓をとりつけて」る映像が浮かんでは消える不思議な感覚に強く惹かれたのだが、これらの歌を読むときの感触はそれに近い。

一首目では服ではなく「乳房を脱ぐさまや脱いだ後に残る「硬貨」が、とても美しいが具体的な像を結べそうで結べないものとして私の心の中に明滅しているように感じる。二首目の「沈丁花」と「架空の文字」、三首目の「何千枚も服を脱ぐ」姿も同様である。四首目では浴槽に雪が積もる様子自体は思い浮かべられるのだが、その浴槽が置かれている空間を考えると映像の焦点があわなくなる。

これらの歌は作者の生活や実感というものから離れ、像を結ぶことのできる一般的な想像の世界からも離れて、より高いところに飛ばうとしている歌のように思える。

単純に考えれば日常生活で使われている口語こそが人生や

経験に結びつきそうだが、これらの歌から受ける感覚はその反対になっている。不思議だ。日常用語ではない文語を用いることで日常生活のひとこまが詩的なものに昇華されやすくなるということなのだろうか。だとしたら、日常用語である口語を用いて詩的な世界を作ろうとするより大きな飛躍が必要になるということなのかもしれない。そしてその飛躍が成功している歌に私は惹かれていくらしい。

● 話語の歌と「私」

さて、この特集には一般的な意味での口語つまり「書き言葉」というより「話し言葉」に近い文体の歌人も多くいる。

このような文体を仮に「話語」と呼び、書き言葉としての「口語」と区別してみる。

カーテンがふくらむ二次性徴みたい あ
願えば春は永遠なのか 初谷むい

風に膨らむカーテンを見たことから広がる心の高まりが独語のような文体で表現されている。世界が「私」の前に瑞々しく開かれていくようだ。

裸木であつてもそれはさくらだよ逢えばお
のずと繋いでいる手 安田茜

桜の樹が冬でも桜であるように二人の関係がいつまでも変わらずにあること。三句目の「よ」はそのことを相手に対して確かめているように思われる。

会っているとき会いたさは昼の月 即席の
カメラで撮ってみる 橋爪志保

上の句では心情の比喩になっている月を下の句では現実のものとして写真に撮ってしまうことにより、不意にフラットな現実に戻される感覚が新鮮だ。
ではこのような話語短歌から私が受ける印象はどのようなものか。

まず、「よ」「ね」「の」といった終助詞や「ちようだいな」「泣いてないすか」「愛なのかなあ」といった話語表現が用いられるとき、そこには文語や口語にはない瑞々しさや生々しさ、柔らかさや、日常生活、等身大、フラット、という印象が生まれる。ここに挙げた三首はそのような日常を日常の言葉で表しながら美しさや詩性を生んでいる。先の口語短歌とはその点で印象が異なる。

ではこれらの歌において作中の「私」に「作者」は感じられるか。文語や口語よりも更に日常の言葉に近い表現方法で書かれている方が「作者」そのものに近づけそうだが、ここでも実際はそうではない。これらの歌の中の「私」は作者自身というより誰とでも交換可能な「私」、誰でもない「私」、あるいは架空の「主人公」のように感じられる。ますます不思議だ。

● 「作者」「主体」と「世代の差」

そういえば、歌評において作品中の「私」を「主体」「中主体」と呼ぶことがかなり一般化してきているようだ。

例えば初谷むいはインタビューに答えて「歌会で短歌を個人的な話を持っていくのはマナー違反。例えば、『これを作

ったのは女性だと思うけど」と評するのはNG。『作った人』と『主体』は別です」と言い、作品を作るときも読むときも他者の領域に踏み込まない姿勢を示しているが（ウェブマガジン「月に吠える通信」二〇二二年六月二十六日）、これは私を知っている歌の作り方や読み方、歌会のあり方とはずいぶん違う（と言いながら実は私も歌の中の「私」を無条件に「作者」と呼ぶことにはためらいがある。一方「主体」という言葉はどうにも好きになれず、結局「歌の中の『私』」のような呼び方になってしまふ。コスモスの東京歌会でなら「この歌の作者は」と普通に言えるのだが）。

私はこの特集に掲載された多くの歌に心を惹かれたが、私からはかなり遠く離れたところで作られたものであるような印象を受ける歌も多かった。そこにはある種の違和感があったことも事実である。この違和感は初谷の発言に見られるような歌に対する姿勢の違いによるもののようにも思える。これが「世代の差」というものなのだろうか。

ただし、この稿に挙げたような心惹かれる歌を読むとき、そこに違和感や世代の差を感じることはない。逆に受け入れられないような歌を読んだとき、心のどこかに「若い人の歌はわからない」という気持ちが生かかっているように思う。「世代の差」という概念は自分がその歌を受け入れられない時の理由づけとして使われているのかもしれない。

●歌集の中の「私」

アンソロジーではそれぞれの歌が一首独立のものなのでそ

の一首ごとのよさを純粹に味わうという読み方になるが、同じ歌を歌集の中で読むとその歌の印象はかなり異なるものになる。このことに気づいたのは田村穂隆の『湖とファルセット』を読んだときのことだった。この歌集では、家族との関係や、自己の精神と肉体の齟齬に苦しむ作者の姿が痛々しく迫ってくるのだが、その中で前掲の一首を読むとき、「生活をあきらめ」ることとその比喩としての「浴槽に降り積もる雪」の切なさがとてもよくわかる。

この特集が出た後、ここで紹介された歌人の歌集が何冊も出版されている。私は他に山下翔の『Inet』、鈴木加成太の『うすがみの銀河』、菅原百合絵の『たましひの薄衣』を読んだがいずれも読み応えがあり、新しい歌の世界が開ける思いがした。そしてそこには交換可能な「主体」とどこまでも「作者」の生が息づいていて、歌集を読むことのよさを改めて知ることになった。

年齢の差はあっても、自己の生と歌に対して真摯に向き合う歌集はこちらの胸に響いてくる。「若い人の歌はわからない」などと思わず、書店の棚で歌集を見かけたら「どれどれ」と開いてみる姿勢はなくさずにいたい（お金も本棚のスペースもないので気軽に買えないのが悩みだが）。若い歌人の作品を知るだけでなく、その歌集を手取るきっかけを作ってくれたという意味でも、この特集を読んだことの意義は私にとって大きかったと言えよう。